学校で英語を学ぶ意義についての一考察

―― 自身の経験から，臨床心理学的視点から ――

青　木　真　理

はじめに

文部科学省は，平成29年（2017年）に学校教育法施行規則の一部改正と小学校学習指導要領の改訂を行った。新小学校学習指導要領等は令和2年度から全面的に実施されることになっている。平成23年（2011年）に導入された小学校5，6年対象の「外国語活動」は，3年，4年生を対象とすることになり，5，6年生は教科の「英語」を学習することになる。

改訂の趣旨について文部科学省[1]は以下のように述べる。

> 小学校では，平成23年度から高学年において外国語活動が導入され，その充実により，児童の高い学習意欲，中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で，① 音声中心で学んだことが，中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない，② 日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係，文構造の学習において課題がある，③ 高学年は，児童の抽象的な思考力が高まる段階であり，より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。
>
> また，小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの，学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や，学校種間の接続が十分とは言えず，進級や進学をした後に，それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている。
>
> こうした成果と課題を踏まえ，今回の改訂では，小学校中学年から外国語活動を導入し，「聞くこと」，「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で，高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」，「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに，中学校への接続を図ることを重視することとしている。

外国語を学ぶ重要性については筆者も同意するものではあるが，本論では臨床心理学的，自我発達的観点から，外国語学習の意義を考えてみたい。主に筆者自身が中学校で受けた英語教育の経験をもとに論を進めていく。外国語教育の門外漢であるため，専門家からすると的外れと感じられる面があるかもしれないが，率直に考えていることを述べてみたい。

1.　中学校での英語との出会い

1961年生まれの筆者は母親が英語塾を経営していたので，小学校時代（1968年から1973年）から，家の中にある英語の本などを通じて英語に触れてはいたし，英語の歌や，簡単な会話を母から教わったりもしていたが，本格的に英語を学ぶのは，中学校入学と同時である。

1974年4月筆者は三重県名張市立桔梗ヶ丘中学校に入学した。この学校で採用していた英語の教科書は，三省堂の『TOTAL ENGLISH JUNIOR CROWN SERIES（以下 TATAL ENGLISH）』であった。

図1に，1年生用教科書のその表紙，図2にStep 1の第1頁を掲げる。

最初に学ぶ構文（構成体）は，主語+動詞+目的語構文であった。その時筆者が感じたのは英語の文法の堅牢さ，とでもいうべきもので，翻って日本語文法を考えたときなんとそれは柔らかく可変的なものかと感じた。

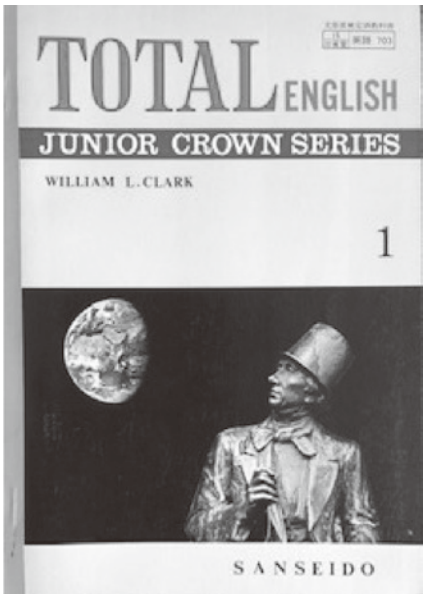

図1　『TOTAL ENGLISH』1年生表紙

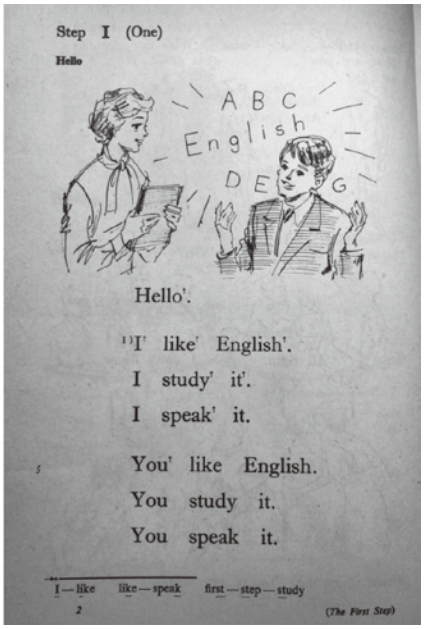

図2　『TOTAL ENGLISH』1年生 Step 1

また，自分が日本語をある程度自由に操っていることを考えると，自分が使っている日本語世界は膨大で複雑であると思えるから，英語において，そのような膨大な情報の世界をいちから学ぶとなると，いったいいつ終わるのだろうか，と，怖れのようなものも感じたことを覚えている。ところが，文法を学びながら知ったのは，英語世界は「構文（構成体）」というものに単純化され，整理されることが可能だということだった。そのことは，英語を学ぶ中での水先案内人となり，これさえ知れば全体の構造をつかめるという安心材料ともなった。そして再度日本語を翻って考えると，英語のような単純化が可能な骨組みは日本語にはないように感じた。そのような日本語を，当時は，非論理的なものとして，英語に劣るものと感じたようにも記憶する。今は日本語の柔軟さを意義あるものとして評価するが。

筆者の英語学習の経験を長々と述べたのは，外国語学習が持つ重大な意義に触れたいからである。外国語を学ぶのは，外国人とコミュニケートすることを目標とするだけでなく，隠れた意義として，自国を対象化する契機となりうるということがあると考える。筆者の経験でいうと，英語の「文法」「構造」を知って，日本語の中で相当するものについて考えをめぐらすことになった。無意識的に自由に使ってきた日本語を意識的に把握しようとしたわけである。英語という異文化と出会うことで，自身が所属する文化，ひいては自分というものを対象化して考えることになった。これは，自我の発達，アイデンティティの模索のプロセスにおいて重要なステップであると考える。

ちょうど本稿を執筆しているとき，朝日新聞に掲載された，米国生まれの日本文学研究者，ロバート・キャンベルの意見を読む機会を得た。2020年4月4日の第11面，オピニオン＆フォーラム欄「『国語を学ぶ』とは」における意見[2]である。キャンベルは，日本人は「国語」ではなく「日本語」として学ぶ重要性を述べる。以下に，記事を

引用する。

> 教育の場で母語を「国語」と呼んできたことで，本来は距離がある二つのもの（引用者註　二つとは日本人と日本語）を不可分であるかのように錯覚させてきた面があると思います（中略）。
>
> 私が学んだ米国の教会付属小学校では，低学年から英語の授業で「文章の解析」を学びました。品詞や主節・従属節を分けたり，時制や話法を分析したりして，徹底的に解剖します。ピンセットで虫を標本箱に分類するように，母語である英語を「言葉」として客観視するのです。一方で，街に出れば，さまざまな英語が飛び交い，母語が相対化されました。
>
> 限られた個人的な経験ですが，私は二つの世界の往復の中で，自分と英語の間に隙間があることを意識できるようになり，日本語の勉強を始めたときにもその感覚が役に立ったと思っています。
>
> 相手との関係や距離によって，玉虫色にニュアンスを変える日本語が私は大好きです，深いひだをもち，重層的な日本語の豊かさを失ってはいけませんが，教育の場では国語より日本と呼んだほうが，母語と客観的に向き合えるのではないでしょうか。

この記事には，我が意を得たりと感じた。キャンベルは「母語と客観的に向き合」うために，母語を「日本語」としてとらえる必要があると語っている。筆者は，英語という対照を持つことで母語たる日本語と「客観的に向き合」うことができる，つまり，日本語を対象化することができると考える。

キャンベルの経験では小学校低学年から母語の対象化は始まっているのであるが，外国語としての英語と出会い，母語を対象化する機会とするには，自我発達の観点からいって青年期のアイデンティティ確立のプロセスの初期が適切だと考える。母語としての日本語を対象化することは，家族の中で形づくられた幼いアイデンティティから自分をいったん引き離し，新しいアイデンティティを構成していく作業と重なる。

ゆえに青年期のとばぐちに立つ中学校で外国語と出会うことは意義深いと考える。小学校段階で英語と出会うことを否定するわけではない。「文法」など気にせずに，身体的に運動的に英語を身に付けることも意味があろう。しかし，あたかも「母語」のように自然に身についた（たかだか小学校での外国語活動ならびに英語で「母語」レベルには到達しないだろうが）英語と，中学生段階で出会い直しすることが重要だと筆者は考える。その出会い直しには，「文法」の学習，理解が不可欠だとも考えるのである。キャンベルが母語である英語を，小学校低学年で「徹底的に解剖」する経験をしたと述べているように，英語を「解剖」するのである。

では，その出会いはどうあるべきか。それを，筆者が中学時代に学校で用いた教科書『TOTAL ENGLISH』を材料に考えていこう。

2. 『TOTAL ENGLISH』（三省堂）

すでに述べたように，『TOTAL ENGLISH』1年生用は，主語+動詞+目的語の構文（構成体）から始まる。筆者が中学に入学した1974年当時日本の公立中学校で用いられていた教科書は5種あった。それらについて比較したものが表1[3]である。BLUE SKY BOOKSについては，実物を見つけることができなかったので，詳細不明であるが，採択率は1.2%と小さいので，当時の中学校英語教育全体に与える影響は小さいものと判断できる。TOTAL ENGLISHは，BLUE SKY BOOKSを除く4つの教科書の中で唯一，1年生用教科書の第1単元で，be動詞ではなく一般動詞，しかも主語+動詞+目的語の構文を扱っているのが特徴である。

言語を学ぶことは，とりもなおさずそこに反映するものの考え方を学ぶことである。Step 1がI，すなわち「私」で始まること，そしてその「私」が，

表 1　1974 年使われていた英語教科書（1 年）

	出版社	第 1 単元の主要な文	第 1 単元	採択率
New Prince English Course	開隆堂	My Name is Bill Brown. This is a park. That's my school.	Lesson 1	54.6%
TOTAL ENGUSH JUNIOR CROWN SERIES	三省堂	I like English. You Like English. You and I like English.	Step 1	22.5%
NEW HORIZON ENGLISH COURSE	東京書籍	This is Japan	Lesson 1	17.5%
EVERYDAY ENGLISH	中教出版	This is a pen.	Lesson 1	4.2%
BLUE SKY BOOKS	学研	詳細不明	不明	1.2%

何かを為すという他動詞で始まっていることに，英米のものの考え方の根本的なものが示されていると筆者は考える。つまり，自我の確立，主体的であることの重視を中心におく文化を端的に示しているのである。

ただ，この *I like English.* を，「私は英語が好きだ」と和訳してしまうと，like の他動詞としての意味が薄らいでしまうので，ここは，中学 1 年生には不慣れな言葉であるが，「私は英語を好む」という和訳もあわせて学ぶ必要があろう。

STEP 1 の本文全体を示す。

＜第 1 頁＞
Hello.

I like English.
I study it.
I speak it.
You like English.
You study it.
You speak it.

＜第 2 頁＞
You and I like English.
We study it.
We speak it.

I like English.
You like English, too.
You speak English.
I speak English, too.

文法の面から言うと，第 1 頁の内容は，目的語を持つ一般動詞で始まり，目的語の代名詞 it への言い換えまでも含む。主語はまず I であり，続いて you。第 2 頁の本文は，You and I から始まり，それを We に言い換えている。

Step 2 以降の内容は，文法面でいうと，Step 2 で，一般動詞の疑問形とその答え方，Step 4 では疑問詞 what を取り上げ，Lesson 7 で三人称単数現在形の一般動詞形（規則変化と不規則変化：*has*）と一般動詞の命令文，Step 8 で *Let's*～文と続く。

be 動詞構文が初めて登場するのはかなり遅く，Step 9 であり，これは 2 学期の最初の単元である。*This is a classroom* という *be* 動詞構文である。Step 11 で *where* と *when*，Step 14 で *There is*～文，*What is on*～文，Step 15 で疑問詞 *how* の *be* 動詞文と一般動詞文，Step 16 で助動詞 *can*，Step 17 で現在進行形，Step 18 で形容詞の比較級と最上級，Step 19 で *who*，Step 20 で *whose* が登場する。

テキストの内容を見ると，主人公は Vincent Wilson というアメリカ人の少年で，父母と兄姉の 5 人家族である（Step 18）。彼は日本人の Tadashi と文通をしている（Step 13）。そればかりか Russia に Stanislas という名の友だちがいて tape letter（イラストによるとオープンリールのテープ）のやりとりをしている（Step 12，図 3）。

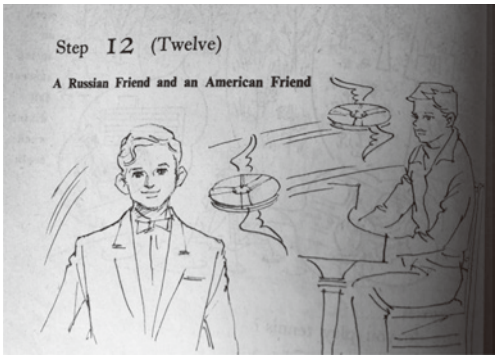

図3　Vincent（左）と Stanislas（右）

東西冷戦下にあった当時，アメリカ人の少年が Russia の少年と友だち関係にあり，しかも tape letter のやりとりをしているという内容を掲載したことには驚かされる。さらには，少年たちが友情を育む背景には，*Their schools are very friendly.,* という一文で，米国の学校と Russia の学校同士の友好な関係があるとすら示されているのである。ここには，米ソの緊張緩和の進行，世界平和に対する著作者たちの切なる願いが読み取れる。

Vincent と Stanislas の友情の物語は，2 年生用でも展開される。江利川春雄[4] はこの内容について，「TOTAL ENGLISH（William Clark 他）では，社会体制の異なったソビエトの少年を主人公の一人として 4 課に登場させている。Book 2 の “THE BEST FRIEND IN THE WORLD” と題された課では，ロシア人の Stanislas がアメリカ人の Vincent に “You're my best friend.” と語るほほえましい情景が描かれている。米ソのデタントが進む中での，この時期の以前にも以後にも見られない異文化理解教育史上きわめて特異な題材であった」と評価している。

『TOTAL ENGLISH』の方法，すなわち中学生が初めて出会う構文を，I で始まる一般動詞＋目的語文とすることは，英米のものの考え方を知るうえで，大変重要であるといえよう。I すなわち自我の確立を重要視する文化である。さらに，I の次に you があり，ついで，you and I すなわち we が来るのは，自分を大切にしながら他者との関係を築くという社会の在り方も示されている。他動詞という，行為を示す品詞が置かれていることは，do すなわち何かを為すことの重視を反映してもいる。

like という他動詞が必ずそのあとに目的語を必要とするということは，英語の構造を学ぶ上でインパクトがある。「～を」に相当する言葉を省略することができる日本語の術語と，目的語をなかば予測的に包含する英語の動詞との違いが，ここに鮮やかに示される。英語の構造を学ぶプロセスが始まる起点としてきわめて重要だと考える。

さて，この *I like English* で始めて英米文化における自我確立の重要性を示し，アメリカ人の少年が Russia の少年と友情関係をもっているという内容のテキストにより東西冷戦緩和の進行を願うという編集意図をもっていたと思われる当時の編集チームのメンバーを見てみよう。

本書の奥付き一覧を示す。

Author　William L. Clark
Advisory Committee
東京大学名誉教授　中島丈雄
東京学芸大学　宮内秀雄
東京都立大学　松浪　有
R.C. Goris
K.D. Butler

Clark は Author であり，それ以外は Advisory Committee として位置付けられている。中心著作者は Clark ということであろう。このきわめて個性的な著作者チームの教科書編纂の歴史について次項で述べる。

3. 『TOTAL ENGLISH』編集チームの教科書編纂史

筆者が中学校 1 年生だった 1974 年，三省堂は会社更生法を申請して倒産した。翌年，筆者が 2 年生になったときの所属校の英語の教科書は東京書籍の『NEW HORIZON ENGLISH COURSE』に変わった。

中学生時代の筆者と三省堂の教科書の関わりは

1 年生時のみであったが，その後三省堂は『THE NEW CROWN ENGLISH SERIES』で英語教科書出版を再開した。学習指導要領改訂（1977 年）の翌年，1978 年のことである。学習指導要領[5]は 1968 年改訂時には「教育内容の一層の向上（「教育内容の現代化」）（時代の進展に対応した教育内容の導入内容）」を柱としていたが，1977 年改訂時には「ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化（各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる）」が柱となり，英語の時間数はそれに伴って，週 3 時間が『標準』」[6] とされた。惟任泰裕によれば「それまでの学習指導要領においては，最低週 3 時間ということが定められていたものの，実際には現場の裁量によって週 4 時間の授業が行われていた」[7] という。この改訂により英語の学習内容はかなりやさしくなった。LESSON 1 はアルファベット学習，LESSON 2 はアルファベットを頭文字に持つ英単語の学習と挨拶，LESSON 3 で初めて登場する構文は，*This is a hat.* であり，『TOTAL ENGLISH』とは全く異なる編集方針と内容である。そしてその編者に，『TOTAL ENGLISH』編集チームの名前はない。

ところが『TOTAL ENGLISH』は他の出版社で再生していた。三省堂の『THE NEW CROWN ENGLISH SERIES』出版と同年の 1978 年，秀文堂から『NEW TOTAL ENGLISH』が出版された。著作者は，三省堂時代の『TOTAL ENGLISH』の著作者であった，中島丈雄，宮内秀雄，W.L.Clark, であり，編集委員会には松浪有の名前もある。

所属を含めた一覧を示す。

東京大学名誉教授・津田塾大学　中島丈雄
東京学芸大学名誉教授・昭和女子大学　宮内秀雄
東京都立大学　松浪　有
東京学芸大学　堀口俊一
千葉大学　岩月精三
茨城大学　仁平有孝
早稲田大学　田辺洋二
お茶の水女子大学　長谷川　潔
東京学芸大学　伊藤嘉一
W.L. Clark
R.C. Goris
Special adviser
ロンドン大学 R.A. Close

筆頭著作者は，三省堂『TOTAL ENGLISH』の筆頭著作者であった Clark ではなく，中島丈雄にかわっており，Clark は，日本人著作者のあとに掲げられている。

Lesson 1 のテキストを以下に掲げる。

＜第 1 頁＞
Hello.
I teach English.
You study English.
I speak English.
You speak English.
You and I speak English.

＜第 2 頁＞
I study English.
You study English, too.
You and I study English.
You teach English.
You speak it.
We speak it, too.

第 1 頁の文の話者は英語ネイティヴの教師で，第 2 頁の文の話者は英語を学ぶ日本人中学生と思われる。

三省堂 TOTAL ENGLISH と比べると対話としてのテキストである点，最初の話者が英語ネイティヴ教師であるが異なる。聞く話す力の重視が反映されていると思われるが，文法的には三省堂『TOTAL ENGLISH』と共通する。

ところで『TOTAL ENGLISH』著作者チームはが教科書をつくるのは三省堂『TOTAL ENGLISH』が初めてではない。三省堂『THE JUNIOR CROWN』（1961 年）がこのチームの最初の教科書である。著作者一覧を示す。

東京大学・早稲田大学　W.L. Clark
東京大学　中島文雄
東京学芸大学　宮内秀雄
福島大学　羽島博愛

本学・福島大学の学芸学部時代の教員が名を連ねている。

この教科書については小笠原林樹氏のブログ[8]が詳しい。小笠原氏は元文部省教科書調査官で『日本人英語の誤用診断辞典』(研究社)の著者であり，大学で英語の講義を担当した（ブログの紹介文より)。以下，「friendly という形容詞」というタイトルのテキストである。

> 昭和 20 年 8 月に日米戦争も敗戦を迎え，平和が戻って世の中の諸制度も改革され，教育制度も新制に徐々に切り換わり，教科書検定制度が発足したのは昭和 30 年代後半のことであった。
>
> 新制度の中学校で使用されるために，いくつかの教科書会社が新しい中学英語教科書を刊行したのであった。その中で私の気をひいたのは，**Junior Crown English Course**（全 3 巻，三省堂刊）であった。というのもこの教科書は W. Clark という米国人が全館（筆者註：原文のママ）を書き下したものだからである。もっとも日本の教科書業界の慣行で，著名な大学教授が共著者とか監修者とか顧問として名を連ねているのであるが，この教科書の場合，私が尊敬しまたなにかと私を引き立てて下さった東大教授（英語学）の中島文雄先生が名前を連ねていたのであったことも，私の関心を引いたのであった。早速中島先生から電話があり，「三省堂から寄贈させたので，小笠原君の感想を聞かせて欲しい…。」ということであった。
>
> （中略）私　私が戦争中通っていた中学校（都立九段中）で使っていたのは，**King's Crown Readers**（三省堂）であった。表紙は英国の王様のかぶる王冠の絵であった。明治，大正と英語と言えば，イギリス英語が正統とされている時代であったからである（実はいまでもイギリス英語のほうが正統であるとみなしている国々のほうが，世界的に言ってはるかに多いことは，後の回で取りあげてみたい。)。
>
> この **King's Crown Readers English** は，戦後は世はもう王様の時代ではないということで，King's をやめて代わりに中学校用には，Junior Crown とし，高校用には Senior Crown としたのである。しかし crown（小文字の c で始める）は，King や Queen だけが着用するとは限らないことは英語辞書で見てみると，すぐ分かることであり，また crown には動詞用法もあることなどが分かり，興味深いものがある。
>
> 話を本題に戻す。私は三省堂から贈られたこの **Junior Crown English Course**（全 3 巻，昭和 36 年（1961））を通読して気に入ったのは，戦後すぐに来日して日本の短大（福島県の桜の聖母学院短大）で教え始めて，日本人の学校英語というものがどんなものか分かり，また日本人の英語力，会話力がどんなものかを知った米国人 W.L. Clark 氏が全巻書き下ろしたものであり，それは他社の大学教授である日本人著者数人が集まって書いた英語教科書の英語とは違って，生き生きとした英語が使われていて，また内容的には米国の中西部あたりの郊外の日常的様子が表わされていて，リアリティーが感じられ，その頃はまだ米国に行ったこともなかった私には興味深いものであった。

そこに使われている英単語の中には friendly（形容詞）/ smart / downtown / drugstore / doghouse / yard / garden（いわゆる「庭」とは違った意味での)/ flour など，それまでの日本の中学英語教科書には使われていない語が散見できたのである。また句としては Me, too. / walk down the road / be across the street /

などが中学1年時に登場していた。

昭和36年（1961）頃の中学検定英語教科書2巻（つまり中2用）には，普通flour（小麦粉）などという日常語は登場させていないものだが，Junior Crownでは13歳前後のSusie，Jane，Tom，Billなどがケーキを作るので，sugar，milk，flourを用意し，そのための容器（the dishes［注意］この意味は単に「皿」のことだけを指しているわけではない。）を持ち出し使った。という記述文が出ている。flourという語は考えてみれば，パンやケーキを作るための必須項目であり，また13歳の女の子や男の子が協力して作るなどというのは，西洋文化ではごく当たり前のことであるから，基礎英語の教本にflourという語を登場させた米国人著者（W.L. Clark氏）はさすがではある。なおケーキを作っていて

The kitchen became very dirty.

Tom and Bill became very dirty,too.

という文が続いていて，ほほえましい情景描写が続いているのである。

またこの教科書にはいわゆる短縮形が多数使われ，いわゆる呼称が用いられていて，日常英語をよく反映したものであった。いつの日か「昭和36年　初版本　**Junior Crown English Course**の英語」というブックレットを書いてみたいと考えている。

長い引用になったが，このブログを発見して，W.L. Clarkが戦後すぐに来日して福島市の聖母女子短大で教鞭を執っていたことを知った。その関係で，THE JUNIOR CROWN ENGLISH COURSEの著作者に福島大学の教員である羽島博愛が名前を連ねていたものと思われる。W.L.Clarkならびに羽島博愛については今後さらに調査を行いたい。

小笠原氏はこの教科書について「他社の大学教授である日本人著者数人が集まって書いた英語教科書の英語とは違って，生き生きとした英語が使われていて，また内容的には米国の中西部あたりの郊外の日常的様子が表わされていて，リアリティーが感じられ，その頃はまだ米国に行ったこともなかった私には興味深いものであった」と述べている。米国人のClarkはアメリカの少年少女の生活を教科書のテキストの中に反映させた。台所で菓子をつくるのが女子だけではなく男子もともにつくっていることも，民主的で新しいジェンダー観に基づくものと思われる。

引用した箇所には「『昭和36年　初版本　**Junior Crown English Course**の英語』というブックレットを書いてみたいと考えている」と書かれているので，その実現を期待したい。

『THE JUNIOR CROWN』1年生用の最初の単元を掲げる。Lesson 1の内容である。

I have a book.
You have a book.
I have a pen.
You have a pen.

『TOTAL　ENGLISH』と同様，I文で，一般動詞＋目的語の文から始まる。

『THE JUNIOR CROWN』は，6年後の1967年にREVISED EDITION　が出版された。著作者は，1961年版の著作者にR.C. Goris（育英学院）が加わっている。所属機関を含めた著作者一覧は以下の通りである。

東京大学　W.L. Clark
東京大学　中島文雄
東京学芸大学　宮内秀雄
東京学芸大学　羽島博愛
育英学院　R.C. Goris

1961年版当時，福島大学所属であった羽島博愛は，東京学芸大に移っていたようだ。所属は一

部かわったが，メンバーは1961年版と同じである。

Lesson 1の内容は，1961年度の内容に加えて，bookをappleに置き換えた4文が加わっている。目次で内容を見ると，1961年度版と1967年度版はだいたい似通っている。

こうしてみると，この『THE JUNIOR CROWN』編集チームが1972年に出版したのが『TOTAL ENGLISH』であったことがわかる。『TOTAL ENGLISH』の副題がJUNIOR CROWN SERIESとなっているのは，『JUNIOR CROWN』の後継であることを明示している。

『TOTAL ENGLISH』（1972年版）の著作者一覧を再掲する。

Author　William L. Clark
Advisory Committee
東京大学名誉教授　中島丈雄
東京学芸大学　宮内秀雄
東京都立大学　松浪　有
R.C. Goris
K.D. Butler

Clarkの所属機関が書かれていないので，日本の大学で教えることから退いていたのであろう。

イラストは挿画担当者の名前がないので正確にはわからないが，画風を見れば，1961年版と1967年版『THE JUNIOR CROWN』，1972年版『TOTAL ENGLISH』は同じ担当者が描いているものと思われる。

ところで三省堂は，この『THE JUNIOR CROWN』1961年版と1967年版の間に1966年に『THE SUN ENGLISH COURSE』という英語教科書をつくっている。著作者は増田綱を監修とするチームで，『THE JUNIOR CROWN』，と『TOTAL ENGLISH』』の編集チームのメンバーは入っていない。なぜこの時期に別の教科書がつくられたかは不明である。この『THE SUN ENGLISH CORSE』の編集方針は『TOTAL ENGLISH』とはまた別な意味でかなり個性的である。Lesson 1は「口頭練習」と題して *What's this? It's a pen.* の会話から始まり，口頭練習はLesson 4まで続く。Lesson 5は「文型練習」と題して，*Dick isn't a teacher.* で始まる。そこからbe動詞構文が続き，主語+一般動詞文が登場するのはLesson 14である。それよりも先に現在進行形がLesson 11で登場しているというのは相当異例である。be動詞文をまず網羅するという編集方針のようである。その後『THE SUN』シリーズは作られていないようである。

『THE JUNIOR CROWN』と『TOTAL ENGLISH』に話を戻す。両者の間大きな変化は，その最初に学ぶ文が，*I have a book.* から，*I like English.* に変わったことであろう。*have* でなく *like* を採用したのは，後々三人称単数現在を学ぶことを考えて，不規則変化動詞ではなく規則変化動詞を用いるという意図もあったかもしれないが，*have* より *like* がもつ積極的な意思を重視したのではないだろうか。*have* は *like* よりも多義性が高く，たとえばMartin Luther Kingの *I have a dream.* の *have* は相当積極的な意思が込められているが，*I have a book.* にはそれほどの積極的な意思は感じにくい。本がそこにある，という程度の叙述である場合もあろう。それに比べると，*I like English* は，話者の意思，主体的な選択が感じられる。

秀文社に移ってからのTOTAL ENGLISH編集チームは，1978年版に続き，1981年版を出版している。この教科書のLesson 1は

A book.　A pen.
I have a book.
You have a pen.

で始まる。単語の羅列から始まるのは，「ゆとり重視」の学習指導要領改訂に伴う，接近しやすい平易さをねらったものであろう。そして続く *I have*～文は，THE JUNIOR CROWNの内容に戻っている。この教科書の著作者一覧を掲げる。

東京大学名誉教授・津田塾大学　中島丈雄

東京学芸大学名誉教授・昭和女子大学　宮内秀雄
東京都立大学　松浪　有
東京学芸大学　彫次俊一
千葉大学　岩月精三
茨城大学　仁平有孝
早稲田大学　田辺洋二
東京学芸大学　伊藤嘉一
神戸商科大学　末延岑生
R.C. Goris
Special adviser　ロンドン大学名誉フェローの
R.A. Close

ここには，もうClark名前はない。Clarkは，三省堂倒産後，秀文堂での『TOTAL　ENGLISH』再生に力を貸したあと，次のこのチームの編集には加わらなかったものと思われる。

4.　ふたたび，英語を学ぶ意義

ここまで，三省堂の『TOTAL ENGLISH』編集チームがつくった中学1年生用英語教科書の変遷を見ながら，著作者らが採用していた英語学習の基本原理を見てきた。全体としては少数派であった*I*+一般動詞+目的語文から始まる教科書は，自我のありかたを重視する英米文化の基本思想を反映している。外国語を学ぶことは，単にコミュニケーションの方法を身に付けるだけでなく，その国の文化を学び，翻って対照的に自国の文化を認識することであると考える。したがって，聞いたり話したりを中心に英語に「親し」む経験を積んだあと行われるべき「本格的な」英語学習は，アイデンティティ形成のプロセスが始まる中学生からが適切であると考えるし，その第1レッスンは，『TOTAL ENGLISH』の方法，すなわちI+他動詞+目的語文であるべきだと筆者は考える。

おわりに

自身の経験をもとに中学生が英語を学ぶ意義，その教材はどうあるべきかを考えてきた。

専門外ではあるが，言葉・コミュニケーションは臨床心理学の基本のひとつでもあるので，今後，英語の学びについての考察を続けたい。

また本論のために探索した資料を通じて，『TOTAL ENGLSH』の前身である『THE JUNIOR CROWN ENGLISH COURSE』の中心著作者，Clarkが戦後すぐ福島県の短大で教鞭をとっていたこと，福島大学の当時の教員，羽島博愛がそれに協力していたことを知り得た。今後，この二人についての調査をさらに進めたい。

本論でとりあげた教科書

表1以外

THE SUN ENGLISH CORSE 1 NewEdition　三省堂　増田綱監修　1966年

THE JUNIOR CROWN ENGLISHCOURSE　1　三省堂　W.L. Clarkほか　1967

TOTAL ENGLISH JUNIOR CROWN SERIES　2　三省堂　W.L. Clarkほか　1972

註

1）文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語活動・外国語編」平成29年（2017年）7月　https://www.mext.go.jp/component/a_menu/educa tion/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf（2020年4月17日最終確認）

2）ロバート・キャンベル「日本語」として客観的に（朝日新聞　2020年4月4日　第11面　オピニオン＆フォーラム欄「『国語を学ぶ』とは」）

3）江利川春雄「戦後の英語教科書にみる異文化理解の変遷」（日本英語教育史研究第7号　1992年　pp 113-145）その「資料1分析教科書一覧」1972-74年度（p 140）を参考に表1をまとめた。

4）3）に同じ。

5）文部科学省「学習指導要領の変遷」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/__icsFiles/afieldfile/2011/04/14/1303377_1_1.pdf（2020年4月17日最終確認）

6）「学校教育法施行規則（抄）」『中学校学習指導要領』文部省，1977年。

7）惟任泰裕「学習指導要領改訂にみる戦後日本の英語教育史」（神戸大学教育科学論集，20　2017年　pp 1-12）

8）英語語法講義～小笠原林樹の英語講義ノートから https://ameblo.jp/classicalpop/entry-11195070263.html（2020年4月17日最終確認）

（2020年4月17日受理）

Why do we teach English in school education?

AOKI Mari

We have discussed how important it is to reconsider the school education of English at a junior high school from the viewpoint of the pupils' ego development. We should proclaim to reconsider the meaning of school education.

My discussion is based on my own experiences at a public junior high school, in which Total English textbooks published by Sanseido were used.

Furthermore, here in this paper, I have followed the history of the textbook-making policy ; the textbooks were focused on teaching the fundamental idea of English and American culture through the English language and its contractions.